

講演会

日時：2015年3月14日（土）

場所：広島大学総合科学部 L201 講義室

演題「たかがバレー、されどバレー」

講師 佐伯 直之先生

講師略歴

- 昭和40年 広島市立大手町中学校入学 バレーボール部入部
43年 広島県広島舟入高校入学（現 広島市立舟入高校）
46年 広島大学入学
50年 広島県立三次工業高校教諭（4年）（現 三次青陵高校）
国体6人制教員の部出場
監督 8期 空田有弘 先生
選手 20期 谷口忠良 先生
22期 宮本賢一 先生
23期 佐伯直之
54年 広島県立広島養護学校教諭（1年）
55年 広島市立舟入高校教諭（25年）
60年 国体少年男子コーチ 準優勝
平成 3年 // 監督 7位
5年 // コーチ 4位
10年 国体9人制成年男子Ⅱ部出場 4位
選手20期 谷口忠良 先生
22期 宮本賢一 先生
23期 佐伯直之
17年 広島市立沼田高校教諭（2年）
19年 同 教頭（2年）病気による休職 9ヶ月
21年 広島市立大手町商業高校教頭（4年）
25年 3月 定年退職
4月 広島市立広島商業高校（再任用）（現在2年目）

始めに「憂きことの なお この身につもれかし 限りある身の力ためさん」。これは、大学を卒業するときに西村先生からいただいた言葉です。苦しくとも生きがいのある人生を送りなさいと言われていたと解釈しましたが、大学では寝たいときに寝て、起きたいときに起きるような自由奔放な日々を過ごしていましたので、4月からの教員生活はそれは大変なことでした。いきなり社会人になって、自分の立ち位置もわからず、まったくゆとりのない

日々を過ごしていましたがバレーボールを通して多くの人と出会い、学び、今日に至っています。卒業論文に「たかが260グラムのボール」と表現した部分がありますが自分は「されど260グラムのボール」に振り回されて中学校からの人生を送ったように思います。主に25年間在籍した舟入高校で男子バレー部の監督をして、指導者として自分なりに学び、取り組んできた事を皆さんに紹介しようと思います。誇れる事は何もありませんが、自分自身もこれまでの教員生活を振り返ってみたいと思います。

<広島市立舟入高校バレー部の沿革>

舟入高校の前身は広島市高等女学校で、バレーボールが盛んな学校として知られており西日本大会では優勝常連校であった。(当時は9人制で西日本大会が最高の大会)

昭和24年 創部 広島市高等女学校から広島舟入高等学校へ

バレーボールの盛んな旧安佐郡を学区としていたため、西日本大会での優勝するなど、県内一の実績を誇っていたが、昭和31年総合選抜制度となり成績は下降気味となる。

昭和31年 入試が総合選抜制度となる

昭和37年 6人制バレーになる

昭和44年 田村正克氏 全日本選手で活躍

総合選抜制以降成績は下降気味となったが、それでもインターハイや中国大会などに出場し、公立普通科高校では優秀な競技実績を残している。また、昭和56年より広島県も他府県同様に国体少年男子の種目が県選抜制となり、個人的に優れた選手に全国大会出場の希望がもてるようになった。舟入高校に於いてもこれまでに合計9名が選抜され、そのうち全国優勝を経験できた者が2名いる。平成に入り、男子バレーの競技人口が極端に減少したことと、総合選抜のため入試には合格したが第一希望の舟入高校に入れない事態が続き、部員5名の時期もあった。

平成10年 入試が単独選抜制度になる

男子バレーの不人気は続いていたが単独選抜になったので、バレーと勉強の両立をめざす生徒が次第に集まるようになってきた。ただし、入学者選抜の合格基準が高くなり、両立できる人材の発掘に苦勞した。その後、部員不足もあったが、現在は活動を続けている。

平成27年 現在卒業生の多くが、選手として監督として各地で活躍している。および広島地区の高体連バレーボール専門部長は3期続けて舟入高校の卒業生で先輩から後輩に引き継がれている。

また、安保 澄氏(所属 公益財団法人日本バレーボール協会)が全日本女子バレーのコーチ、久光製薬コーチを務めるとともに、アジア大会で女子チームの監督を務め、東京オリンピックにむけての強化プロジェクト「チームコア」のスタッフとして活躍している。

校務とクラブ活動との両立について話したいと思います。教員になり社会人になった当初は、学生時代にだらしのない生活を送っていた事が主な原因ですが、早朝から夕刻まで勤務される先生方がすばらしく立派に思えました。現在はさまざまな形での教員研修がありますが、その当時は先輩教師の授業や業務の遂行を観察することや、助言が一番有意義で実のある研修でした。業務がだいたい理解できるようになった頃には、頼まれた業務はどんなに忙しくてもたいてい「YES」と言ってきたように思いますし、「NO」と言いたくありませんでした。そして校務の役割分担は学年会や分掌会で教員同士が時には選挙というやり方でしていましたので、自己都合が優先したりして時間が多くかかっていたのですが、ある先生と同じ学年や分掌になるとものの5分で解決します。そのリーダーシップの理由を聞くと「なーに、わしが一番難しい事（みんながやりたくない業務）を一番に引き受けるけえ、（独断的に割り振っても）誰も文句がいえんのよ」と答えられました。こうした経験を通して、教員の業務は細々とした面倒くさい事ほど重要であること、常に生徒を目の前に据えて行う事、業務は120%こなして初めて完了したと言えることなどを理解できたと思います。ただ、教師として一番大変な業務は日々の授業を充実させる事で、そのための工夫や準備を怠ってはいけませんが、自分は具体的目標を誰よりも早くグラウンドや教室に行くことにしてそれを実行しました。そして私の教師としての根本姿勢は担任をする事で、教職員組合の執行委員や生徒指導部、総務部などの部長をしているとき以外はクラス担任を受け持ちました。なぜならバレー部員は共通の目標を持ち、価値観も同じです。その生徒達を指導し、舟の舵を切ることや信頼を得る事はいくら人数が多くてもさして困難ではありません。しかし、クラス経営となると、不登校気味の生徒や規範意識の希薄な生徒など多様な価値観を持つ生徒達をまとめて行かなければなりません。ある意味で教師としての資質を試される場でもあります。また、授業やクラスにバレー部の生徒がいる事はあまり好みませんでした。クラス経営や学校行事の際は部員がいると雑用をしてくれるので非常に頼りになりますが、クラスの仲間に特別な存在がいる事は良くないと思いましたし、彼らにとっても一日中私の顔を見て緊張している事になります。私がそういう考えに至ったのは、クラブの成績がたいてい県内ベスト4か、それを窺う位置に定着した頃、「おまえは監督としては、一応の成果を出しているが、一教師としてはどうじゃろうか？」と試合か練習試合か忘れましたが、県内強豪チームの監督と夜に一杯飲んでいるときに問われた時です。一生懸命生徒に関わっている姿を見てさらに大きくなるための助言であったと思います。教員として、またバレーボールの指導者として経験を積んでいく過程で、思い上がりや自分本位になりそうなとき、また、自信を失いかけたときに周囲の方々からタイムリーに助言をしていただく事ができ教師として指導者としてまた人としてのバランス感覚を磨く事ができたと思

います。そして生徒はその姿を見て成長すると思います。

次に、部訓・バレー部の生徒に望んできた私の指導方針についてお話します。部の規則やモットーは特にありませんし、文言が並べてある横断幕などは作った事はありません。決勝戦などに出たときは、学校の体育祭などで掲げる「ファイト、フェア、ファイ」の3F精神の横断幕を借りていました。そして生徒にはいつも「バレーの勝者が人生の勝者ではない」ことや学校内では「良き生徒」であるよう努力しなさいと言ってきました。これは先生に従順であったり、失敗のないよう行動しなさいという意味ではありません。

日常生活では普通の高校生のように授業中に怒られる事や、失敗があったとしても15歳～18歳の人間として当たり前だと思います。誰でも大人でも教師でも失敗はします。また生徒の失敗を許さない教師にも逆に不信感を持ちます。私は、失敗した後の態度で人間性は問われると考えます。「すみません」と素直に言える人の方が逆に信頼を得る事だってあるのです。私自身も、たくさん失敗しましたし、失敗して素直にしょんぼりしている生徒には好感が持てました。服装違反や、遅刻の常習、補習をさぼって練習に来たりなど失敗の限度を超えた確信犯の時は厳しく指導しましたが、そうでない場合は寛容だったと思います。一つには、バレーをなくしたら何も残らない人間に育って欲しくないという思いもありました。他の高校生がする苦労は同じように乗り越えて欲しいと思っています。バレーで頑張っている事に自信は持っても、特別ではないのです。バレーがない時は普通の高校生でいいのです。ただ、練習中や試合では極端に違って厳しかったように思います。部活動は教育の場と少し離れて、彼らの修行の場だと考えたからです。特に緩慢な動作、怠惰なプレーや相手を見下したような試合態度をとると容赦なかったように思います。少し強いからといって相手を見下す者は、逆に強いチームに萎縮するのです。

指導者の中には選手を自分の懐で囲うタイプと、逆に突き放して特に厳しく当たるタイプと二通りありますが、私は後者の方でした。

私は他の指導者の方からたくさんのことを学びました。大学を卒業し教師、バレーボールの指導者になって、多くの方々のご指導ご助言をいただきました。また、「出る杭は打たれる」の格言と同じような思いをしたこともあります。

広島大学の1学年先輩の伊藤博之先生（現千里金蘭大学）や宮本賢一先生（現OB会長・広島県立皆実高校）には多くの事を学びました。伊藤先生は国際審判員として世界中を回られ、アテネオリンピックでは決勝戦の主審を務められました。世界のバレーの技術の進歩に関しても敏感で私にも熱っぽく語られました。大阪遠征合宿では大阪を代表するような指導者、学校との対戦や懇親会でバレー談義をする機会を多く持ってくださいました。どの先生方も話し方に特徴があって、聞いていて引き込まれるものがあり、それま

では、言わなくても「そのうちわかるじゃろう」と思っていました。指導者には「話術」も必要な資質と考えさせられました。宮本先生の「親には親の生活がある」と保護者と一線を画し、研究熱心で生徒目線にたったぶれない指導にはいろいろ生徒指導のヒントを与えていただきました。今、全日本女子で盛んにアピールしている高速ハイブリッド攻撃と同じようなことはすでに35年も前に田舎の分校でされていたのです。そして、私が尊敬する先生方の共通点は、選手に対する態度が個性豊かで教師としてではなく「素の自分」を出されていたように思います。たしかに、「ありのまま」でぶつかる疲れません。

それらの先生方と一つの技術に関して熱く語る場面の一つ一つが自分の力になったように思います。また、遠征の大きな目的は生徒の練習以上に、指導者がいかに学ぶかということにあることも分かりました。したがって、自分のチームが強いからとか、弱いからという基準で遠征を組むことはしませんでしたし、他県から来られる場合も、そういう基準は考えた事はありません。「弱くてすいません」と言われる場合もありましたが、むしろ不愉快でした。強いか弱いかは生徒の責任ではなく、すべて指導者が責任を負うべき事で、ましてや他人に言う事ではありません。また、多くを語らなくても、生徒の取り組む姿勢や態度を見れば、その指導者の取り組んでいることはすべてわかります。技術的な事やフォーメーションを聞かれる場合もあり、一応は自分なりの考えを答えますが、選手一人ひとりの技量の違いもあるので本当の答えは練習の中にあると思います。一番難しいのは毎日練習にでる事です。練習試合をするときは、今でも試合内容もさることながら相手チームの監督の先生の言動を見逃さないようにしています。当時の名監督 M 先生は練習試合前のアタック練習で、「もう2cm肘をあげてみい」「白帯（ネット上段のこと）が見えるか」など、1本ずつの指示が非常に具体的でしつこかったです。わたしは、単に「高いところで打て」とか、「手を伸ばせ」とか、曖昧な指示しか出していませんでしたのでそれこそ「目からウロコ」でした。M 先生は定年退職された後男子チームのコーチをしておられ、私と出会った時に「バレーの神さんがまだやれゆうて、夢にでるんじゃ」と真面目に言われました。「負けた」と正直思いました。指示を具体的に出す事と、バレーに取り組む姿勢をその方から学ばせていただきました。そうしたことを踏まえ、一つ一つの技術を経験値から指導するのではなく、理論的裏付けの必要性を感じ、自分なりにまとめるよう努力をしました。例を挙げると、「ボールは必ずネットの上段から来て、味方はネット方向に返球する」などで、だから、こういう技術が必要とされるなど、とにかく原点に返り(ZERO BASE 思考)発想の転換から創造へと発展するよう努力したと思います。

県内のある強豪チームに練習試合ではほとんど負ける事はない年もありましたが、練習試合の直後の公式戦で負けたとき、なぜうちが負けたのか敗因

を聞きました。その時はその行動に対して「おまえは偉い」と高評価をいただきました。愛知県の先輩の学校に遠征に行った時、相手は全国大会常連校でしたので、ほとんど勝てませんでしたが「あんたの偉いところは、どうしたら強くなるのか聞かないところじゃ」と言われました。どちらが正しいのかは分かりませんが、どちらも「なにくそ」という顔をしていたと思います。

私のチーム作り・練習に関する話を話します。練習や試合を通して常に生徒に言ってきたのは、「勝つための最短距離は毎日の努力を怠らないことで、特別な作戦や練習はない」「苦しいことと限界は違う」ということです。

練習のほとんどがアウトコートでした。夏は炎天下で冬は木枯らしの中アウトコートで練習しました。これは私の主義でもなんでもなくただ、一つの体育館を体操部、バスケット部（男女）、バドミントン部（男女）、バレー部（男女）がローテーションで使用するので仕方がなかったのです。そして今思い出すのはそのアウトコートでのレシーブを中心とした練習の日々です。県外遠征に行くと必ず、何故選手の色が黒いのか聞かれました。

夏場は日没が遅いので、練習時間は取れましたが、冬になると放課後はものの1時間で暗くなります。暗くなってからが生徒は大変で、素足になって持久走を繰り返した年もありました。その年は部員全員が4月の体力測定で1500mが4分台で、2月の校内持久走大会（10km）では1位から3位を独占し10位以内に7人入りました。この結果は逆に陸上部やサッカー部に打倒バレー部として火を付けたように思います。セッターが足の裏の傷が原因でリンパ管炎になり素足はやめました。また、体育館のカーテンをあけて窓からグラウンドに漏れてくる明かりでサーブレシーブをした事もあります。年代によって生徒に必要なと思う練習をこの日没からの時間に費やしました。

トレーニングは毎日練習前に行っていましたが、アタックの高さが不足するぶん、馬力に頼るしかないとの結論に達し、ウェイトトレーニングを取り入れ、それまでのバレー体操のようなトレーニングは一切取りやめ、市内のトレーニングジム（アスリート）に通わせると共に、OB会費を利用して用具を揃えました。また県内の工業高校に頼みこんで、スクワットラックやプレートなどを作っていただきました。選手の足や胸板は目に見えて発達したように思います。ウェイトトレーニングの良いところは、扱える重量によって自他共に進歩が確実に確認できることや翌日の筋肉痛で達成感があることです。それにしても練習時間はおそらくベスト4チームはもちろん、近隣の他校と比較しても確実に少ないと思います。

今から思うとなんの意味のない練習内容を繰り返したのかと思うこともあります。意味のないような練習を繰り返した時期の方が試合では粘り強いと思います。その時期は練習内容云々でなく下手な選手を何とか上手にしようとして厳しく当たった事がその理由だと思います。5～6年経験を積むと、練習の要領やチーム作りの要領が分かったように思います。良い事か悪い事か

分かりませんが、たとえば、サーブレシーブが下手な選手はレシーブフォーメーションを工夫してレシーブをしなくて済むようにしたり、攻撃力のある選手に徹底的にトスを集めたりする事など、分業を徹底するとジグソーパズルみたいに複雑な組み合わせになります。チームが一定の力を付け勝利するのは早いです。練習時間の少ない舟入高校では必要な事でした。エースをセンターに置いてセンターオープンを打ち、ブロックをし、バックアタックをするなど酷使します。テレビドラマで言う「主役」を作りますが、選手には『主役ばかりのドラマは面白くないしそのうち飽きる、「悪役や脇役」がいて完成する、名脇役がいるドラマは面白い、また、家が倒れないのは大黒柱を支える「斜交い」(斜めに打ち込んだ支え)があるからこそ、丈夫になる』など、ドラマや家に比喻してそのエースを支える事の重要性を教えました。

バレーに関して言えば、「つなぎ」が生命線です。2段トスとつなぎは違います。2段トスはつなぎの一部です。要するに家の煉瓦と煉瓦をくっつけるセメントのようなものです。そして、選手の中には技術的には何の取り柄もないのに、チームに入れると全体の流れが良くなって勝てる選手と、逆にうまいのに何故か流れが悪くなってチーム全体のミスが増える選手がいます。これはボールを落とすまい、つなごうとする執念の違いだと思いますが、なかなか練習ではある程度までしか鍛えられませんでした。これこそ「基礎・基本」であり「素質」だと思っています。

<「ZERO BASE 思考」から考察したこと>

- 基礎と基本は違う。勝ちたい、上手になりたいという気持ちを基本とし、そのために技術、体力を培うのが基礎である。
- とっさのプレーが基礎、基本通りになるまで、基礎、基本練習を繰り返す。
- 監督の第1番目の仕事は、入部してきた選手が、バレーや仲間を好きになる事に辛抱強く取り組む。好きになれば、少々の困難は乗り越える。
- チーム作りには監督の個性が出る。しかし年度ごとに選手が入れ替わるので、そのたびに違った素材で一つの作品を創造しようとする感性が必要である。
- 人間はミスをする動物である。下手な選手がミスをするのもリズムのうちである。
- 調子が良いときに何故良いのかを分析する。それを繰り返すと何故調子が悪いのかが分かる。
- ファインプレーは練習しなくてもできる。
- 打球系の競技であるが野球やテニスのように道具を用いない。手を上手な打具にする必要がある。そのためには、手を常に視野にはいるところに置く。(パス、レシーブ、ブロックなど)
- コート面がサッカーやバスケットでいうゴールになる。レシーブはそのゴールを守る手段である。

- ネットの方向、ネットより高い位置からしかファーストボールは来ない。
(それに対するレシーブ体型、構え)
- ネット方向に返球し、ボールの位置が変わる。(3段攻撃)
- ネット上は相手との競り合いの部分である。
- ボールの中心は、皮のなかの空気の一点にあり、何もしなくてもボールは跳ねる。
- フォームの矯正は全筋力を使うとできない。7～8割を繰り返す。
- <アタック>・バックスイングがすべてと言って過言ではない。
 - ・スイングの速さと打球の速さはほとんど関係ない。
 - ア、手首より高く肘を持ち上げる事。
 - イ、手首は打つ前には脱力している事。
 - ・「ウォーキングステップ」+「ランニングステップ」+「ブレーキングステップ」の中でタイミングをとるにはウォーキングステップが最も大切である。
 - ・1m20cmくらい幅跳びをしたほうが高くジャンプしている。
- <ブロック>・最後のシメは肩をしっかり上げる。
 - ・ジャブステップを入れた方が移動は早い。
- <サーブ>・ネットに向かってやや斜めに立つ。(フローターサーブ)
- <レシーブ>・つま先より膝が前→膝より肩が前→肩より顔が前
 - ・ある程度脚を広げた方が、低い姿勢をとりやすい。
 - ・手のひらをやや上に向けた方が、ボールの勢いを殺しやすい。
- <トス>・セッターは味方からの攻撃に備えて構える。(レシーブの構え)
 - ・ネットを背にしているのは、セッターだけである。(常に味方の方を見ている。他の選手はネット方向を見ている)
- <ゲーム>・パス+アタック+ブロック+サーブ=ゲーム とは決してならない。

ア、つなぎを忘れがちである

①声を出す。「まかせ」「たのむ」etc

②ボールへのカバーリング「攻撃は味方からもある」

③常にボールに正対する。(体をよじってでも)

④相手の攻撃だけでなく味方の攻撃に対応するためのカバーリングのフォーメーションを作る。

・ブロックとサーブで5～6点とれば勝てる。(7～8割)

ア、自分のチームがミスをしなない事が前提

・全くミスをしなかったら、勝てる。

ア、相手のミスでも点が入る競技である。(サッカーやバスケットとは違う)

・3段攻撃を多く使ったチームが勝っている。(守備が良いチーム)

・オーバーパスを多く使ったチームが勝っている。(//)

バレーの技術も日進月歩で、選手の体格やルールによっても求められる技

術は変わります。いまは高校生の女子チームの練習の手伝いをしていますが、選手や、練習試合、公式試合を通して学ぶ事は多くあります。勝敗も大切ですが「球道」の精神はいつまでも持ちたいと思っています。

<質疑応答>

遠藤：失礼します、66期生の遠藤靖崇です。今日は教師として、バレーボール指導者として、多くの点を学ばせていただきありがとうございました。先生が部員5名で試合にも出られなかった時があるとおっしゃられていたのですが、私も教師を目指しているため、そういう時の選手のモチベーションが下がってしまうと考えてしまうのですが、先生はそういった時にどのような工夫をされて選手のモチベーションを上げ、次の代につなげたのでしょうか。教えてください。

佐伯先生：いつもと変わらん練習をしました。20人おる時もありましたけど、その時と同じ練習をしました、毎日練習しました。つまらんプレーはやっぱり怒るし、同じようにやりました。決勝戦に出たような年もあるし、出ないような年もあったけど同じことをとにかく。こっちがめげたらいけんと思って、人数が少ないということで私がくじけたらいけんので、同じことをとにかく「お前ら1番を目指せ」、「5人でも1番をめざせ」ということでやってきました。答えになったかどうか分からないのですが。

遠藤：分かりました。ありがとうございます。

浴田：失礼します。66期生の浴田です。今日はお話ありがとうございます。7ページにある7番目のファインプレーは練習しなくてもできるという項目があったのですが、私はファインプレーというものは練習の中で、ボールが来なくてもフォローに入ったりカバーしたりという真面目なところが試合でファインプレーにつながると思っているのですが、人間なのでやっぱりさぼってしまったり練習だからこれくらいいいやという気持ちが出てくると思うのですが、佐伯先生はそのような精神的な面でファインプレーをさせるような指導は何か考えられていますか。

佐伯先生：ファインプレーをさせるような練習はないのですが、たいがい外のコートですから、すぐ隣でサッカー部が練習をやるとるんですけどそこにボールを蹴り上げて、サッカー部の練習の邪魔になるくらい走ってスライディングキャッチさせて、ガンガンに行かせました。とれるわけがないんですけど、それでモチベーションを身に付けさせようと思い、ボールを追いかけさせてやったりしたこともあります。

浴田：分かりました。ありがとうございます。

大須賀：失礼します。66期生の大須賀です。私は佐伯先生がおっしゃったバレーの勝者が人生の勝者ではないということであったり、バレーをとったら何も残

らないような人間になってほしくないという考えにも共感できました。
現在、私も先輩方からバレーを通じて何を学ぶかという言葉をよく頂くので、佐伯先生の考え方は今も広大のバレー部の伝統として残っているのだと、とても感じることができました。

そこで質問なのですが、私が中学生の時は佐伯先生がおっしゃったような、突き放して特に厳しく怒るタイプの先生だったのですが、生徒側としてはとてもそれに対して反感を買うと言いますか、それをすごく反抗してしまったりとかということがあったのですが、佐伯先生は指導者の立場としてそのような厳しく当たる時に失敗してしまったなど思われたことがあったり、これはやらなければよかったなど思うことがありましたら教えてください。

佐伯先生：それはいっぱいあります。毎日考え込みました。クラブの練習では生徒は私の前で「ハイ」と言って気を付けをしています、練習後に部室に戻ったら「殺したろかい」ぐらいのことは話していたんじゃないでしょうか。指導者の立ち位置としておったら面倒くさいけれども、おらんかったら寂しいぐらいが丁度いいんじゃないかと思っています。先ほど言われた指導の失敗というのは腐るほどあります。今だったら生徒になぜ怒ったか丁寧に説明するんですけど、とにかく、逃げ道がないくらいボロカスやった時がある。怒りすぎてすまんかったのうとか、たぶん今なら声をかけていると思います。私がやった事が決して全部ええわけじゃないし、中学生でも高校生でも人間ですからその人格を否定するようなことは言っちゃならんかったな、アイツにはあの生徒には悪いことをしたなど今でも思うことがあります。

以上です。

大須賀：ありがとうございます。失礼します。

佐伯先生：ちょっと、付け加えですけれどもこうやって厳しくやって、とにかく問答無用にやってきた時のほうが、生徒が大人になって結婚する前に嫁さんを連れてきたりだとか、わしが決めることでもないじゃろうと思うような事を相談されたり、子供が生まれたらすぐ連れてきたりだとか、そういう風なのはその時(厳しい時代)のほうがなぜか結びつきが深く、「恨んどるじゃろうのう」と思うのですが、結構そうでもなかったりというのもあります。

磯村：失礼します。66期生の磯村美菜子です。今日はお話ありがとうございました。一番印象に残ったのが、7ページのZERO BASE 思考から考察したことの3つめで、監督の一番の仕事は選手がバレーを好きになることである、というのがとても印象に残ったのですが、例えば高校のバレーであまり試合に出ることがなくて、中心選手ではないけれど3年間を通して、バレーを好きになったり、上手になりたいという気持ちの基本ができて、技術的にもあまり成長しなくても、その選手を自分が見て良かったとか、満足とかそういう感じになったりしますか。

佐伯先生：言いたいことは分かります。その時にはね、なかなかこっちも分かっていない、向こうも分かっていないということもあると思います。レギュラーで活躍していた子とそうでない子でどうしてもこっちには後ろめたさがある。

この子にも活躍させてやりたいけれど、ここでメンバーチェンジをすると負けるかもしれない、それがあるので後ろめたさというものが必ず残ります。

そういう子が卒業して「先生ー」ゆうて来たりすると、ものすごく救われるというかとても報われるといったことが何度もありました。要は未だにできていないのですけれど、一人ずつを大切にする。それぞれの置かれた立場なりに「お前が必要じゃ」と、今になったらもっともっと親切丁寧に教えていけるとは思いますけれど、その当時は突き放して、いつかは分かるじゃろうと思ったけど全然分からなかったり、結局こちらの真意が伝わらなかったりするので、丁寧に理解を求めるといふことが必要だったのではないかと、反省をしております。答えになってるかどうかは分からんけど。

磯村：ありがとうございます。

宮本先生：佐伯先生とは44年の付き合いです。僕の一下下ですから、橋原先生と同期で彼のトスを我々二人は打ってきました。橋原先生と僕は対角です。昔はすごかったんですよ。

佐伯先生のトスで般若のように、鬼のようにと言いますか、そんなバレー生活をして、今だに体はガタガタなのですが9人制バレーを若手を鍛えるという事でやっていますけれども、彼との長い付き合いで一番強く感じているのは今日の講義を聴きましてさらに思いを強く持ったのは、彼の人間性が本当に自然体というか、西村先生が小学生達に教えている時にだいたい三回に一回くらい言われることは、会津藩の青少年、10代の子供たちを教える時に「什の教え」というものがあるのですけれどもそのうちの三つ、私は孫にいつも言うのですけれども、1つ目「嘘をついてはなりません」、2つ目「卑怯なふるまいをしてはなりません」、3つ目「弱い者いじめをしてはなりません」と、いうものがありまして、佐伯先生を44年間見てきたのですけれどもその三つの教えを守られて、それも自然体で守られてきたというか、そういう印象を強く持っております。

だから、一下下なのですけれども橋原先生共々、一生付き合えるような自慢の後輩であり、心の友であります。という事で今日の講演ありがとうございます。

佐伯先生：次に話す時はね、一杯飲みながらも話したほうが良いのではないかと思うのですけれども。今日はありがとうございました。